

被災地の言葉（1）

被災地では人々は未曾有の現実にも身を置き必死にもの考えた。誰しもが哲学者であった。そしてそこで語られた言葉の端々には万感の思いと意味が込められていた。震災から2年数カ月たった今、被災地内外で筆者が耳にした言葉をもう一度かみしめてみたい。

「もう少し待って下さい」

大震災の報に接したとき、それまで何らかのかたちで地域とかかわってきた人達は、一刻も早く現地に駆けつけたいと思う反面、なかなか足を運ぶことができなかったと言う人が多かったのではないだろうか。私もその一人であった。人々が暮らすそれぞれの地域には、それぞれの文化があり、そこに入るには一定の“作法”があることを知っているからである。ましてや、多くの肉親を亡い、住む家を失い、故郷を追われた人々に、見ず知らずの者である自分がかける言葉もなかった。被災地に入るには何かの口実が必要であった。被災地に入る道の交差点に、「野次馬は入って来るな！」と書かれた段ボールがくくりつけられた椅子が置いてあるところもあった。

我が家ではいつも南三陸町歌津のワカメを仙台市内のデパートで買い求めていた。柔らかく、味も香りも良いそのワカメは絶品であった。私はたったそれだけの事を口実に、ささやかな支援物資を持って歌津に向かったのは震災から2週間ほど経ってからであった。高台にある小さな保育所に人々は身を寄せていた。途中目にした惨状に話しかける言葉もなく、ようやく口に出た「大変でしたね。家ではいつも歌津のワカメを食べているんですよ」という言葉に、支援物資を受け取ってくれた漁師さんは、少し遠くを見るようにして「もう少し待って下さい」と返してくれた。この言葉に逆に救われたものである。

2年たった今、確かに歌津をはじめ三陸の各地ではワカメの生産が復活し、以前のような、いや、以前にも増して美味しいワカメを仙台でも入手できるようになっている。種付けから生育まで時間のかかるホヤ、カキ、ホタテなどに比べ、ワカメは真っ先に復活する海産物であることを漁師さんは知っていたのである。陸の惨状は惨状として、海の恐ろしさは恐ろしさとして、三陸の人々は海を見ながら、海とともに暮らしているのである。「海に恨みはない」。これもある漁師さんの言葉である。

「特に無いね」

震災から一カ月ほどたった頃、全国から寄せられた支援物資をライトバンいっぱい積み込んで被災地に向かった。三陸の海は言葉どおり津々浦々。それぞれの景色があり、それぞれの暮らしがあり、人々の思いもそれぞれである。決して一括りにできるようなものではない。自衛隊が支援している大規模な避難所は避け、いろいろな事情で個人宅に人々が身を寄せているようなところを探し当て、支援物資を届けることにした。干してある洗濯物が目印であった。

そのような家を見つけ、道路を上がって行くと、父ちゃん達はパイプ椅子に腰掛け、焚き火を囲んでいる。怪訝そうな顔をされる中、遠慮がちに「何か必要な物はありませんか。少しばかり持ってきたのですが」と言うと、少し首をかしげ、「特に無いね」という答えが返ってきた。そして「あっちに母ちゃん達がいるから聞いてみて」と言う。

あっちにいた一人の母ちゃんに話しかけるとすぐに周りの母ちゃん達に伝わる。積んで来た段ボールを開けると、あれもこれもと、自分のもの、子供のもの、父ちゃんのもの、じいちゃんのもの、と、実に多くの物を受け取ってもらうことができた。確かに自分のことを考えても、男というもの

体面も気にするし、大体日々の暮らしのために何がどのくらい必要かもわからないものである。このことは当然であった。

この度の震災では、普段ニュースにも行政課題にもならないような、ごく普通の地域の、普通の人々の、普通の暮らしが根こそぎ失われ、人々は、この普通のことの大切さと、この普通のことが世の中の大部分を占めているということを思い知った。そしてこの普通のことは実質的に母ちゃんやばあちゃんが支えているのである。

復興とは、世の中の耳目を集めるような、先端やら先進モデルのようなもので被災地を埋めつくすことではない。世の中の大部分を占める、普通の人々の普通の暮らしがこれからも続けられるように、条件を整えていくことである。しかし、現在の復興をめぐる世の中の動きと、被災地、被災者の暮らしや心の間には大きなギャップがあり、それが埋まるどころか、逆に時間とともに拡がりつつあるようにすら見える。真の復興のためには、被災地それぞれの母ちゃんやばあちゃんの視点が不可欠なのではないだろうか。